

# 乳幼児の言葉・集団参加・自己統御領域の成長・発達を評価する 英語版簡易尺度作成の試みについて

大 森 弘 子<sup>1)</sup>・柴 田 長 生<sup>2)</sup>

## 1 問題と目的

本研究では、乳幼児の言葉・集団参加・自己統御領域の成長・発達を評価する英語版簡易尺度（以下、「英語版簡易尺度」と略す）を作成することにより、保育者による乳幼児の日常生活の様子の簡易評価を通して、日本語圏の乳幼児と英語圏の乳幼児との言語発達、及び言語と関連する領域の成長・発達段階の国際比較が可能になることを目指す。具体的には、乳幼児が生きていくために能動的に発揮できる生活像の目安（尺度）に関する「社会生活能力目安表（改訂版）」（柴田，2017）（表1）に着目し、社会生活能力を「言葉（意思交換）」「集団参加」「自己統御」の3つの領域で捉え得る英語版簡易尺度の作成を行う。また、現職保育者による英語版簡易尺度の使用・評価により、グローバル化される保育現場における、発達障がいがある英語を使用する乳幼児の早期発見及び早期対応の役割を果たすことが期待できる。

柴田・大森（2019）は、柴田（2017）が行った「社会生活能力目安表（改訂版）」作成のための調査結果から、幼児期後期の言語発達に着目し、言語の発達と他の発達領域、特に集団参加能力や自己統御能力との関連について考察した。調査及び考察結果は、岡本（1982）が述べ

た「（言葉の組織的獲得後に）その生活を言語化し、人々との交わり方を変え、自分の行動をコントロールし、自我感情を客観化し概念や知識の形成に参加してくる。」という子どもの言葉の発達に関する重要な提言を支持した。そして、5歳前後の言語発達の重要性の検討を行った先の研究（柴田・大森，2019）の際に、「英語圏の乳幼児は、日本語圏の乳幼児に比べて言語獲得の時期が早い」ということが話題になり、先の研究結果は、英語圏その他の外国語圏の乳幼児においても同様の結果となるのかという素朴な疑問に行き着いた。その後、第1筆者が英国に行く機会があり、上に述べた疑問に取り組むために、先の研究で用いた「社会生活能力目安表（改訂版）」の中から「言葉（意思交換）」「集団参加」「自己統御」の3つの領域を英訳し、第1筆者の知人である英国の保育者に依頼して、保育担当幼児の評価を試行的に行った。本研究に至る動機は、以上の経過から生じたものであり、英国で実施した調査結果を集約・検討し、作成した英語版簡易尺度を検討・公表することが本研究の第一目的である。

「社会生活能力目安表」は、現場の保育者や保護者などが、子どもの成長・発達の特徴やそのバラツキ像などを簡易に分かりやすく把握・評価できる目安（標準化された評価尺度）であ

<sup>1)</sup> こども教育学部 非常勤講師

<sup>2)</sup> こども教育学部 教授

り、知的障がい児の障がい程度判定の際に、社会適応能力の評価尺度としても活用されている（柴田, 2013：2016）。一方、我が国で外国にルーツがある乳幼児が増増する中、外国にルーツがある乳幼児を含む社会統合に向けた社会生活能力の目安となる効果的な尺度という点には必ずしも焦点が当たっていない現状にある。我が国では、発達障がい（自閉症、情緒障がい、学習障がい（LD）、及び注意欠陥多動性障がい（ADHD）など）がある子どもの数が増加していることが報告されている（文部科学省, 2018）。また、豊中市（2016）は、保護者の育児不安が増加していることを報告している。こ

れらのことは、外国にルーツがある乳幼児にとっても例外ではない。

こうしたことを背景に、保護者の社会的孤立を未然に防ぐためにも、発達障がいがある乳幼児の早期発見及び早期対応が必要であり、保護者の最も身近な専門職である保育者（幼稚園教諭・保育者・認定こども園保育教諭）の果たす役割が大きくなってきている。この役割を果たすため、保育者にはわかりやすく簡単に活用できる子どもの社会生活能力（自立と社会参加に必要な生活への適応能力）の「目安」を正しく理解することが必要である。また、保育者が乳幼児の社会生活能力の成長・発達を評価し理解

表 1 社会生活能力目安表（改訂版）尺度（抄）

水準	言葉領域	集団参加領域	自己統御領域
0:6	人に向かって声を出す	人から働きかけられると自分からも嬉しそうに反応する	人の声で気分が静まる
1:0	バイバイされると反応する（何らかの身振りでの応答をする）	拍手などの身振りをまねる	禁止された時に動きを止める
1:6	単語がいくつか言える	体操をまねて、リズムに合わせ手・足・体を動かす	簡単な指示に従う（ボイしてきてなど）
2:0	絵本などを見て、ものの名前が言える	同じ年齢の子どもが集まっているところに関心を示し、近づこうとする	何でも自分でやりたがる
2:6	おしっこが出たことを自分から知らせる	誘われると仲間に入る	その場の雰囲気を感じ取り場に合った動作を大人にあわせてすることができる
3:0	名前を尋ねられると氏名を答え、数種類の二語文を話せる	クラス集団の中で、皆と一緒に歌が歌える	「イヤだ」と反抗するのではなく、自分なりのつもりや自己主張をとまなう
3:6	自分が使いたい物を友達が使っている時に「かして」という	ままごとなどのごっこ遊びで役を演じる	促されれば、簡単な「きまり」を守ることができる
4:0	「それは、どうしてなの?」「それからどうなるの?」といった質問ができる	運動会などでリズムに合わせて、皆と一緒に遊戯や踊りなどができる	欲しいものがあっても、説得されれば我慢できる
4:6	自分が経験したことを大人や友達に自分から伝え、会話を楽しむ	じゃんけんで勝ち負けがわかる	禁止されていることを他の子がやった時、その子を注意する
5:0	電話で、簡単な会話を続けることができる	ゲームなどで年少の子どもを気遣ったり、手助けしたりすることができる	大勢の人の中や乗り物の中でダダをこねたりしない
5:6	経験した場面を絵で描き、尋ねれば描いた内容を説明することができる	鬼ごっこなどの集団遊びに、ルールを理解して参加することができる	夜、自分の部屋でひとりで寝ることができる
6:0	何かを決める時、「～だから～しよう」と、理由をつけて提案できる	遊びや集団活動の中で、ゆずりあうことができる	1時間ぐらいなら、独りで留守番できる

注）柴田（2017）による 6 つの評価領域（身辺自立・移動・作業・意思交換・集団参加・自己統御）より、言葉（意思交換）・集団参加・自己統御を抜粋して記載した。また年齢区分の設定は、中間値を用いて「0:6（6 か月）」というように分類した。

できる力量形成が喫緊の課題となっているといえる。

発達障がいがある乳幼児の保護者は、発達障がいに対する理解不足から、育児不安を強め、育児に対する自信を失い、自らの養育能力を低く評価している可能性が高い。また、核家族化及び都市化が進む中で、社会的孤立感を持ちやすいと推察される。外国にルーツがある乳幼児の保護者にとっては、なお一層不安は高いと推察される。これらの状況に対応するために、厚生労働省（2019）は、2020（令和2）年3月までに、10の言語に翻訳した「母子健康手帳」のひな型を製作する方針を決定した。このように、保育者にも、グローバル化を視野に入れた保育の整備が求められている。英語版簡易尺度は、グローバル化が進む現代の保育現場において活用される可能性が高いと考えられる。

## 2 方法

### (1) 英語版簡易尺度作成のねらい

近年、集団生活の中で保育者は、集団行動ができない乳幼児や落ち着かない乳幼児、こだわりが強い乳幼児など、発達障がいがある乳幼児にみられる特徴に気づき、早期発見につなげる可能性が高いことが示されている（笹森ら、2010）。このことから、保護者にとって最も身近な専門職として、保育者には発達障がいがある乳幼児にみられる特徴に敏感に気づき、早期発見ができる力量を持つことが求められている。また、保育者が発達段階における乳幼児にみられる特徴となるグローバルな視点での目安が必要となる。そこで、英語版簡易尺度作成のねらいは、次の3点になる。①乳幼児の言葉・集団参加・自己統御領域の成長・発達が保育者にわかりやすく理解できる英語版簡易尺度を作成する。②乳幼児の社会生活能力の成長・発達

を評価し、発達障がいがある乳幼児の早期発見及び早期対応に有効な手段となることを目指す。③保育者の気になる乳幼児（発達障がいがある乳幼児や外国にルーツがある乳幼児など）への理解力向上を目指す。

### (2) 英語版尺度作成の手順

まず、英語版尺度作成に先立ち、幼児教育・保育領域の乳幼児の発達を評価する尺度において、根拠に基づく高い効果の研究を概観した。英語版尺度作成に当たっては、社会生活能力目安表（改訂版）に準じ、原著者（第2筆者）から翻訳の許可を得た。

次に、本研究は、英語版簡易尺度への翻訳を試みたため、何らかの修正を加える配慮が必要であった。特に、言葉と文化特有の表現の違いを克服した評価項目でなければ、信頼性のある英語版簡易尺度になり難いと考えられた。そのため、原著者を含む筆者らは、日本在住30年の経験のある英国の翻訳家1名に英語版尺度翻訳を依頼し、英国の言葉と社会的価値に即したものにするために修正を加えた。筆者らは、翻訳家とSNSやSkypeなどを通して評価項目の文言及び内容などについてのやり取りを繰り返し、協議のうえ、英国で活用できる信頼性の確保された作成を試みた。評価項目の内容に、英国と日本との間で大きく異なる言葉と文化特有の表現が含まれている場合には、特に注意を払った。ここではこれらの注意点に関して、英国の社会的価値に即した部分を紹介する。

社会生活能力目安表（改訂版）の評価項目において、自己統御領域6歳の評価項目「1時間ぐらいなら、独りで留守番できる」は、「Can carry on an activity alone without a teacher's help for up to four hours（保育者の支えが無くても4時間位、独りで自立して過ごせる）」に変更された。なぜなら、英国では乳幼児が危険な目に

遭う可能性のあるため、乳幼児を独りにすることは違法であるからである。また、自己統御領域 2 歳 6 か月の評価項目「その場の雰囲気を感じ取り場に合った動作を大人にあわせてすることができる」を「Wait when told “After this” or “Later”（「後で」と言われて待つ）」、自己統御領域 3 歳の評価項目「「イヤだ」と反抗するのではなく、自分なりのつもりや自己主張をとまなう」を「Know the difference between “What’s mine” and “What’s yours”（自分の物と他人の物を区別する）」とし、英国の現職保育者が英語で書かれた評価項目を読み取る際に、最も伝わりやすく理解できるように配慮した。

日本語は、主格や所有格などの人称代名詞が表すことを省略することが多い。一方、英語においては、人称代名詞を文中に補わねばならない。協議の結果、言葉領域 3 歳 6 か月の評価項目に「I（私は）」を加えて主語を補い、言葉領域 2 歳 6 か月の評価項目、言葉領域 5 歳 6 か月の評価項目、自己統御領域 4 歳の評価項目、及び自己統御領域 4 歳 6 か月の評価項目に「s/he（彼は・彼女は）」を加えた。また、自己統御領域 2 歳の評価項目に「his/herself（彼自身・彼女自身を）」を加えた。このように、翻訳家と筆者らが意見を交換し、英語版では人称代名詞を加えることとした。さらに、言葉領域 2 歳 6 か月の項目に日本語で省略されていた目的語「an adult or the teacher（大人や先生に）」を加えた。

調査用紙への記入に際し、保育者には、この調査用紙の「できる（恐らくできるだろう）」と思われる評価項目に、大きな○をつけるように求めることとした。なお、調査用紙の妥当性を確保するため、尺度開発の経験がある研究者に妥当性の検証を依頼しつつ作成を進めた。

### 3 結果と考察

#### (1) 英語版簡易尺度の特徴

表 2 には、英語版簡易尺度を示した。英語版簡易尺度は、社会生活能力目安表（改訂版）より「言葉（意志交換）」「集団参加」「自己統御」の 3 つの領域を抜粋し、保育者がわかりやすく簡単に保育現場で活用できることを目指す。また、各領域評価における課題の適切性・配当年齢区分の妥当性・課題配列の順序性・順序内容などについて検討する。

柴田（2017）によって開発された社会生活能力目安表（改訂版）は、各年齢の子どもが生活世界を営むために獲得してほしい「代表的な能力」を、「身辺自立」「移動」「作業」「意志交換（コミュニケーション）」「集団参加」「自己統御」の 6 つの領域毎に、年齢段階毎に目安として示したテーブルであり、発達診断のためのツールではない。しかし、各評価項目は各時期の子どもの実態に沿った内容となっており、保育者がそれぞれの子どもの成長・発達の様子を把握・理解しやすい内容となっている。また、社会生活能力目安表に示した各課題が、当該年齢児の標準的な「到達目標」として示されている。このことが、逆に保育現場における発達障がいその他に関する、保育者（あるいは保護者）による早期発見に資する目安（尺度）になると考えられる。

英語版簡易尺度の特徴は、保育者がわかりやすく乳幼児の言葉・集団参加・自己統御領域の成長・発達を捉えることができることである。また、本研究によって今後、日本語圏の乳幼児と英語圏の乳幼児との成長・発達課程を比較することもできる。英語版簡易尺度を活用することによって、保育者は各領域の成長・発達の到達状況を乳幼児毎に把握し理解する。このことを通して、保育者の発達障がいがある乳幼児の

早期発見及び早期対応が促進され、保育者が乳幼児の発達理解を深めるための力量形成を推進していくための端緒を開くことができる。

## (2) 乳幼児の成長・発達を評価する調査用紙の内容

英語版簡易尺度は、客観性及び信頼性の高い評価がなければ、適切に保育現場に反映させる

表2 英語版簡易尺度

Age	Vocabulary	Group Participation	Self-control
0:6	Talk to someone, engaging eye contact	Respond enthusiastically to an approach or prompt from another person	Become calm/regain composure at the sound of a person's voice
1:0	Respond when someone says goodbye	Mimic or copy a clap or other gesture	Stop doing something when ordered to do so
1:6	Speak a number of words	Move the hands and feet or body to a rhythm	Follow simple instructions
2:0	Give the name of things when pointing at them in a picture book	Show interest in children of a similar age and approach them	Wants to try everything by his/herself
2:6	Tell an adult or the teacher when s/he has wet themselves	Join in with others when invited to do so	Wait when told "After this" or "Later"
3:0	Make various kinds of two word sentences	Sing along with others in the class	Know the difference between "What's mine" and "What's yours"
3:6	Ask a friend "May I borrow/use ..."	Role play when playing house or other pretend games	Keep to a simple plan or decision that's been made
4:0	Form questions such as "Why", "What happens"? Etc	Dance and move in time to a rhythm	Be patient even if there's something s/he wants (toy or candy, etc)
4:6	Initiate and enjoy a conversation with friends	Understand winning and losing when playing "Rock-paper-scissors"	Call a friend's notice to a given rule if s/he isn't paying attention
5:0	Hold a simple conversation on a telephone	Show consideration when playing with younger children, helping where necessary	Fret or become difficult in a crowd of people ( <b>reverse</b> )
5:6	Draw a picture of something s/he has experienced, and explain the picture if asked	Understand and abide by the rules when participating in group play	Go to sleep without needing help from adults
6:0	Able to justify his/her reasons or put a case forward when there's a decision to be made	Compromise when playing with others or engaged in group activities	Can carry on an activity alone without a teacher's help for up to four hours



ことはできない。そこで、英国の現職保育者が捉える乳幼児の発達にも適応するかどうかを測るために、調査用紙を準備した。具体的には、英国の現職保育者に、幼児の成長・発達の評価を依頼し、質的分析による実証的検証を行った。調査用紙の回答は無記名であり、主に次の3点で構成した。①英国の現職保育者(評価保育者)の保育状況を問う属性として「性別」「保育経験年数」「所属」、②保育者が対象とした幼児(被評価幼児)の属性として「年齢」「性別」、③英語版簡易尺度の36評価項目(回答は「はい」「いいえ」の2件法)、が調査用紙の内容である。

評価保育者には、データは全て統計的に処理し、個人を特定することはないことを伝え、同意を得た上で調査を実施した。なお、調査実施に関わる配慮などは、日本発達心理学会(2000)及び保育学研究倫理ガイドブック(2010)の倫理基準に準じ、佛教大学「人を対象とする研究計画など審査」倫理審査委員会の承認(2019-28-A)を事前に受けた。

### (3) 調査対象者と調査時期

調査対象者は、英国北西端カンブリア(Cumbria)の保育所(nursery)、幼稚園(pre-

school)、及び小学校のレセプション・クラス(reception class: 英国では日本の年長から義務教育が始まるため、小学校0年生クラス)で働く現職保育者9名(男性2名・女性7名)であった。

調査場所であるカンブリア地域にはケルト系のカンブリア人が多く暮らしており、幼児の描く顔の絵にも表現されている(図1)。また、山と湖の豊かな自然に恵まれ、『ピーターラビットのおはなし』の作者であるポター(Potter, B.)がかつて散策を楽しみ、多くの物語の舞台となった場所でもある。保育所の園庭でアルパカ2頭を飼育するなど(図2)、保育者は乳幼児と自然や動植物との触れ合いを大切にしている。

表3には、調査協力に応じた英国の評価保育者、被評価幼児、及び評価結果一覧を示した。保育経験年数は1年から30年、この平均値は12.94(標準偏差9.57)であった。

調査時期は、2019年9月であり、実施場所は、英国の保育者が勤務する保育所、幼稚園、及び小学校の面接室であった。筆者らは、調査用紙及び封筒などを準備し、調査対象保育者に配布し、調査用紙への記入を求め、その場で回収した。



図1 保育所内の壁面の様子



図2 保育所の園庭の様子

#### (4) 英国における幼児の言葉・集団参加・自己統御領域の成長と発達

表3には、評価保育者毎に記した幼児の言葉・集団参加・自己統御領域の成長・発達に関する評価結果を示した。調査用紙への記入に際し、保育者には、「できる（恐らくできるだろう）」と思われる評価項目に、大きな○をつけるように求めたため、表3の○は成長・発達の評価項目を獲得しているものである。以下、評価保育者A～Iの各被評価幼児を、言葉・集団参加・自己統御領域に分けて、詳細に検討する。

「言葉」領域の成長・発達に関する評価について、評価保育者G以外の被評価幼児は、通過標準年齢の評価項目に到達していた。従来か

ら、日本語圏の乳幼児が英語圏の乳幼児に比べて発話できる語彙数が少ないとの報告（e.g., Fernald & Morikawa, 1993）があり、言葉領域の成長・発達については先行研究と一致する。一方、英語圏の乳幼児の発話できる語彙数が多いにもかかわらず、評価保育者Gの被評価幼児は、通過標準年齢に到達していないという結果となった。個人差も考えられるが、「保育者が1人の幼児について答えてほしい」と求められた時、評価保育者Gは気になる幼児を思い浮かべたのかもしれない。なぜなら、評価保育者Gの被評価幼児は、集団参加及び自己統御領域の成長・発達も通過標準年齢に到達していなかったからである。幼児における「言葉」領

表3 評価保育者、被評価幼児、及び評価結果一覧

評価保育者				被評価幼児		領域	通過標準年齢											
保育者	性別	経験	所属	年齢	性別		0:6	1:0	1:6	2:0	2:6	3:0	3:6	4:0	4:6	5:0	5:6	6:0
A	女	12年	N	3:0	女	言葉	○	○	○	○	○	○	○	○		○		
						集団参加	○	○	○	○	○	○	○				○	
						自己統御	○		○	○		○		○				
B	女	20年	N	4:0	女	言葉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
						集団参加	○	○	○	○	○	○	○	○				
						自己統御	○	○	○	○	○	○		○	●	○		○
C	女	21年	P	4:5	女	言葉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
						集団参加	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
						自己統御	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○
D	女	4.5年	P	4:6	女	言葉	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○
						集団参加	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○
						自己統御	○	○	○		○	○		○				
E	女	30年	P	4:8	男	言葉	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○
						集団参加	○	○	○	○	○	○	○					
						自己統御			○	○	○	○		○				
F	女	1年	P	5:0	女	言葉	○	○	○	○	○	○		○		○		
						集団参加	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
						自己統御	○	○	○	○	○		○	○				
G	女	10年	R	6:0	女	言葉	○	○	○	○	○	○	○			○	○	
						集団参加	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
						自己統御	○	○	○		○	○		○				
H	男	3年	R	6:1	男	言葉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
						集団参加	○	○			○		○	○			○	○
						自己統御	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
I	男	15年	R	7:0	男	言葉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
						集団参加	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
						自己統御	○	○	○	○	○			○				

注) 所属 N: nursery P: pre-school R: reception class ●: 逆転評価項目

域の発達が基盤となり、「集団参加」「自己統御」の育ちを促進していく可能性が高いとの報告（柴田・大森、2019）があり、幼児の3つの領域（言葉・集団参加・自己統御領域）が関連している先行研究と一致する。

調査用紙の中で評価保育者 C から、言葉領域 3 歳 6 か月の評価項目「Ask a friend “May I borrow/use ...”」は、「Ask a friend “Please can I borrow/use ...”」にした方がよいという指摘があった。評価保育者 D、E、F の被評価幼児も到達しておらず、このことから、言葉領域 3 歳 6 か月の評価項目は、幼児が生活の中で何気なく自然に使用する丁寧な言葉に修正した方がよいことが推察された。

「集団参加」領域の成長・発達に関する評価について、評価保育者 E、G 以外の被評価幼児は、通過標準年齢の評価項目に到達していなかった。また、評価保育者 H の被評価幼児には、集団参加の弱さが見られた。例えば、評価保育者 H の被評価幼児には、集団参加領域 2 歳の評価項目「同じ年齢の子どもが集まっているところに関心を示し、近づこうとする」、集団参加領域 3 歳の評価項目「クラス集団の中で、皆と一緒に歌が歌える」、集団参加領域 5 歳の評価項目「ゲームなどで年少の子どもを気遣ったり、手助けしたりすることができる」に成長・発達の課題があることが示された。このことから、園や学校の集団生活の中で、保育者は英語版簡易尺度を通して、子どもの特性がはっきり可視化され、非常に高い言語領域の評価を示した幼児でも、集団参加で言葉の力を発揮することが困難で対人関係の弱い幼児の存在が明らかになることがわかった。しかし、ここで注意しなければならないのは、評価保育者 H の被評価幼児の生活環境をも視野に入れなければならない点である。なぜなら、調査用紙回収後に、評価保育者 H は、「（被評価幼児が）この地域

に越してきたばかりで、幼児の仲間集団や地域社会との関係が薄い」と被評価幼児の生活状況を語ったからである。つまり、評価保育者が集団生活の中で幼児の参加をどの程度適切に把握し観察しているかということも影響の一つとして考えられる。

「自己統御」領域の成長・発達に関する評価について、評価保育者 B、G、I の被評価幼児は、通過標準年齢の評価項目に到達していなかった。また、評価保育者 D、E、F の被評価幼児は、通過標準年齢の評価項目に到達しながらも、自己統御領域 3 歳 6 か月の評価項目「促されれば、簡単な「きまり」を守ることができる」及び（又は）自己統御領域 4 歳の評価項目「欲しいものがあっても、説得されれば我慢できる」に到達していなかった。このことから、自己統御領域 3 歳 6 か月及び 4 歳の評価項目を具体的にわかりやすく修正した方がよいのではないかと推察された。また、日本国と英国との社会的価値の違いが考えられる。当該年齢水準の乳幼児の 80% 程度が獲得できているような評価項目は何かを、英国の現職保育者や幼児教育の研究者に意見を求める必要がある。例えば、自己統御領域 3 歳 6 か月の評価項目「促されれば、簡単な「きまり」を守ることができる」を「トイレの後に手洗いをするなどの「きまり」を守ることができる」、自己統御領域 4 歳の評価項目「欲しいものがあっても、説得されれば我慢できる」を「友達が遊んでいる遊具ですぐに遊びたくても、説得されれば順番を守って待つことができる」とするなど、英国の保育者に、最も伝わりやすいように配慮する必要性が示唆された。

以上のように、若干の修正点があるものの、社会生活能力を「言葉」「集団参加」「自己統御」の3つの領域で捉える英語版簡易尺度は、保育者にとって幼児の成長・発達をわかりやすく理



解でき、早期発見及び早期対応の評価の目安としての役割を果たす可能性が示唆され、英語版簡易尺度の妥当性がうかがえた。

#### 4 まとめと今後の課題

本研究では、社会生活能力目安表（改訂版）に基づき、社会生活能力を「言葉」「集団参加」「自己統御」の3つの領域で捉える英語版簡易尺度を作成し、英国で試行した。これにより現職保育者が乳幼児の社会生活能力の成長・発達を評価し、発達障がいがある乳幼児の早期発見及び早期対応に有効な手段となることを目指した。英語版簡易尺度を実証的検証に繋げるため、調査用紙を準備した。調査用紙は、評価保育者の「性別」「保育経験年数」「所属」、被評価幼児の「年齢」「性別」、及び言葉・集団参加・自己統御領域の36評価項目から構成されていた。その結果、主に次のような点が明らかになった。

- ① 英国の現職保育者に、英語版簡易尺度による幼児の成長・発達の評価を依頼し、質的分析による実証的検証を行った。具体的には、英国の現職保育者（評価保育者）に保育状況を問う属性と保育者が対象とした幼児（被評価幼児）の属性を加えた英語版簡易尺度による調査を英国で試行した。英語圏の乳幼児も日本語圏の乳幼児と同様に発達段階毎の特性が見られ、「言葉」「集団参加」「自己統御」の3つの領域が関連していることが推察された。英語版簡易尺度は、若干の修正点があるものの、保育者による発達障がいがある乳幼児の早期発見及び早期対応の評価の目安としての役割を果たす可能性が示唆された。
- ② 保育者が幼児の社会生活能力を「言葉」「集団参加」「自己統御」の3つの領域で捉

えることができる可能性が示された。また保育者は、乳幼児の帰宅後に今日1日の保育を振り返り、明日への保育の課題に向かっていく。その際、英語版簡易尺度は、乳幼児の社会生活能力の成長・発達を理解し評価できる保育者の力量形成に資することが期待できる。

- ③ 英語版簡易尺度における自己統御領域の評価項目を再検討する必要性があった。自己統御領域の中には、英国の保育者が理解できない評価項目があることが示された。この背景には、日本国と英国との社会的価値の違いが考えられる。当該年齢水準の乳幼児の80%程度が獲得できているような評価項目は何なのかを、英国の現職保育者や幼児教育の研究者に意見を求める必要がある。

今後の課題として以下のことが見いだされた。

まず、データ収集上の課題について。本研究では、英国の幼児の言葉・集団参加・自己統御領域の成長・発達の評価結果について考察した。今回は希少なデータの質的分析の機会を得たといえるが、データ数が9名と少なく、自己統御領域の発達段階の特性に連続性が得られない評価項目の回答があった。データ数が多い場合、日本語の評価項目を汲み取りながら、評価保育者が理解しやすく、英語として自然な表現に改善するなど、より詳細に英語版簡易尺度を検討することができる。今回得られた英語の評価項目を道標としつつも、データ数を増やし質的研究を追加することによって、保育者にわかりやすい評価項目を同定することが課題である。

次に、評価保育者が用いる英語版簡易尺度に関する手引きの作成について。本研究で得られた英語版簡易尺度は、国内外で英語を使用する

保育者に拡大することが可能であるが、その場合、個々の評価保育者に差がでると推察された。つまり、評価保育者が乳幼児の言葉・集団参加・自己統御領域の評価について、過大評価や過小評価をする可能性も考えられる。本来、英語版簡易尺度に回答するためには、保育者として相当の知識や経験が必要なものもある。また、評価保育者の社会的価値の違いが大きく影響する可能性がある。今後、保育者が乳幼児の社会生活能力の成長・発達を評価できるだけの統一された手引きの作成が課題である。

### 謝辞

本研究にご協力いただきました英国保育者の先生方に心より感謝申し上げます。

### 引用文献

- ・ Fernald, A. & Morikawa, H. (1993) Common themes and cultural variations in Japanese and American mothers' speech to infants. *Child Development*, 64(3), pp.637-656.
- ・ 厚生労働省. (2019). 2019 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業. <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000527554.pdf>. (2020 年 1 月 3 日閲覧)
- ・ 文部科学省. (2018). 平成 29 年度通級による指導実施状況調査結果について. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/toku-betu/material/\\_icsFiles/afiedfile/2018/05/14/1402845\\_03.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/toku-betu/material/_icsFiles/afiedfile/2018/05/14/1402845_03.pdf). (2020 年 1 月 3 日閲覧)
- ・ 日本発達心理学会 / 監修, 古澤頼雄・斉藤こずゑ・都筑学 / 編著. (2000). 心理学・倫理ガイドブック—リサーチと臨床. 有斐閣.
- ・ 日本保育学会理綱倫領ガイドブック編集委員会 / 編. (2010). 保育学研究倫理ガイドブック (pp.1-96). フレーベル館.
- ・ 岡本夏木. (1982). 子どもとことば (pp.9-10). 岩波

新書.

- ・ Potter, B. (1902). *The Tale of Peter Rabbit*. Frederick Warne.
- ・ 笹森洋樹・後上鐵夫・久保山茂樹・小林倫代. (2010). 発達障害のある子どもへの早期発見・早期支援の現状と課題. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要第 37 巻 (pp.3-15).
- ・ 柴田長生. (2013). 知的障害児における社会生活能力の評価について 1 ～社会生活能力目安表による評価の意義と妥当性について～. 京都文教大学臨床心理学部研究報告第 6 号 (pp.13-37). 京都文教大学.
- ・ 柴田長生. (2016). 知的障害児における社会生活能力の評価について 2 —療育手帳判定結果から見える障害像に関する一考察—. 京都文教大学臨床心理学部研究報告第 8 号 (pp.3-26). 京都文教大学.
- ・ 柴田長生. (2017). 社会生活能力目安表改訂への試み. 臨床心理学部研究報告第 9 集 (pp.37-48). 京都文教大学.
- ・ 柴田長生・大森弘子. (2019). 幼児期後期における「言葉領域」の発達と、子どもの成長全般への関連について—よりよい保育実践の視座を得るために—. 臨床心理学部研究報告第 11 集 (pp.3-16). 京都文教大学.
- ・ 豊中市:「障がいのある子どもへの支援の基本的な考え方」. [https://www.city.toyonaka.osaka.jp/kosodate/hattatusien/2809\\_shougaijisien.files/2809rubinasi.pdf](https://www.city.toyonaka.osaka.jp/kosodate/hattatusien/2809_shougaijisien.files/2809rubinasi.pdf). 2016 年.

(2020 年 1 月 3 日閲覧)

### 付記

本研究は JSPS 科研費 16K04636 の助成を受けたものです。